武家名目抄稿

職名部附録十九上

廿四上

和書門 類
二五二〇八 號
七七 函
一 架
四五四九 冊

内閣文庫
和書 類
二五二〇六 號
四五六 冊
一五三函
一 架

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457（ 87）
函號 153 275

国立公文書館
National Archives of Japan

職附十九上
圖書局文庫
日本政府圖書

武家名目抄稿第廿四冊上

職名部附録十九上目録

御劔役
太刀役
御笏役
調度懸
鎧着
兜持 又兜役

小具足持

具足役

弓征矢役

行縢役

武家名目抄稿第廿四冊上

職名部附録十九上

御劔役

太刀役

吾妻鏡云文治三年正月十二日甲寅二品并若公御行始也入御于八田右衛門尉知家南御門宅千葉小太郎役御劔知家献御馬御劔等云々

国立公文書館
National Archives of Japan

又云同年年(四)三月十五日辛亥於鶴岡宮道
場行大法會景(時)宿願大般若經供養也二品
為御結縁御出供奉人々刷威儀而臨御出
之期｜召武田兵衛尉有義可役路次御劔
之由被仰之処頗(難)渋申之間殊有御氣色先
年持小松内府劔事。(已)謳歌洛中是非源家恥
辱哉彼者他门也是者一门棟梁也｜對揚
如何者則召朝光賜御劔有義不能供奉逐

電云
又云正治二年二月廿六日壬午中将家御
参鶴岡八幡宮(中略)御出供奉人先陣随兵十
人(名略)次御劔役後藤兵衛尉基綱次御調度
懸糟屋藤太兵衛尉有季次御甲著大井次
郎実久次御冑持中野五郎能成次御後衆
廿人(下略)
又云建保三年八月廿二日己酉地震鷲恠

事被」行ニ御占」之処重變之由申」之仍去御所
入ニ御相州御亭」信綱持ニ御劔」亭主被」移ニ他所
云々
又云嘉禎元年六月廿九日庚寅御出行列
先陣随兵御車 路次间無布衣御劔役人御後五位六位
下結六位 帯ニ弓矢 前民部少輔相摸式部大夫北條
弥四郎経朝 寺門内役ニ御劔」〇下畧之
承久軍物語記云ゐつとしあすかましやうくん

きらしちなましんらめのまことしせくのあひさう
かうし殿上人もとも殿上人ならんまえしをとけ
殿上寺これぞいちのちせう綾天れあらへとよ
ろとひておほしう内所よりきやうの大支
右大臣ぎんのやくふはじまりかるよしきことし
めしきをいまつ一のこちふうしち殿上の承ま打
くあしのあそんはなんのやくをつとめ見しゆ
へりに戦あくあくしこうさま殿とうや

鎌倉年中行事云正月五日ノ夜御行始管
領ヘ御出恒例也御劔之役御一家中略公方
様出御之時管領門ノ外迄被参御輿ニメ
サレナカラ御礼有テ妻戸ヘ御輿ヲヨセ
御下アル時御劔ノ役人御輿ヨリ御劔ヲ
取出シテ持参御傍ニ被立申
又云同月八日御行初ノ前ニ自管領衆中
ヘ以使公方様恒例ニ可有出御間可参由

アリ翌日重以使夜前御酒等申沙汰目出
度之由被申太刀馬ヲ其使ニ可出太刀御
劔并御沓ノ役評定衆之方ヘ太刀馬等被
饋事規式也
又云正月廿三日鶴岡御社参日限雖不相
定依為廿日此廿余日ニ如此記之御幣ノ
役並ニ御劔之役ノ方ヘハ以御使被仰出
被両役ハ御一家其外ニハ上杉名字被勤

之其外ハ里見名字被」勤御劔之役」御沓之
役ハ名字不」定多分海老名名字也御劔ノ
役ハ深直垂正月ノ御社参キハ御幣ノ役
別、有之ノ間御劔ノ役ハ御輿ノ御次ニ
被」参正月ニアラサル時ノ御社参ニハ御
劔役御幣ノ役ヲモ兼對アリ其時ハ御劔
ノ役御輿ノ先ニ被参御幣ノ役並御劔役
力者中間人數不定中略御輿ナハウチノ御

鳥居弓ニツヘキヘタテミ被立御劔ノ役
並御沓役被参ヲ有ニ御待」時両人被」参御劔
役御輿左ノ方ヨリ参テ御簾ヲ右ノ手ニ
テアケテ御劔ヲ給テモタルミ時御沓役
御輿ノ左ノ方ヨリ廻テ御イゲヾヲメサ
申立ノキテ畏テ公方様ヲトヲシ申御劔
ノ役ハ御左ノ方御沓役ハ御右ノ方ニ歩
テ公方様モ役人両人モ鳥居ノ内ヲ御透

アル也其外ハ皆々鳥井ノ外ヲメクラル
ヽ也（下略）
又云御所造并御新造之御移徙之様躰之
事（中略）御酒先三献御祝管領ヨリ参御銚一
自役人一色右京亮
又云御元服ノ時管領出仕アリ御装束調
テヲモテノ御妻戸ノ間ヘ有御出御酒式
三献御銚御鎧弓征矢皆行縢参其以後御
馬御鞍オキテ一疋牽添一疋ハタセ也御
厩別当被請取之此御祝トモ皆自管領参
ル御銚役御一家弓征矢海老名行縢本間
名字度々勤之衆中之記録ニ有之御具足
役者名字不定役人御荷用ノ人皆直垂也
又云御社参ニハ御幣役其跡ニ御銚両役
ハ御一家被勤之也役〔彼〕役ハ御輿ヨリサキ
也御沓役ハ御輿ノ跡也

又云一成氏御社参ノ御剱役一色左衛門
佐御沓之役本間弥三郎
年中恒例記云正月十日一殿上人ノ役ニ
テ随ヒテサヤヲ被持テ随ヒサシノ外ノ
縁エンニ御前ニ伺公候間伺候被申也
則コレヲモ御剱ノ役ト申也 中略 随ヒテサヤ
ニ振ル事ナキトキハ禁裏様ニ御事ルヲ
従内儀伺奏被申ニ加シ仍テ御進上之云々

仍後日ニ随ヒテサヤノ代トシテ随倉ヨ
リ千疋ヲサメ申也是モ折紙ヲ伺奏之付
ニ随供同朋元渡之云々
宝篋院殿将軍宣下記云延文三年十二月
十八日之午刻為勅使以日野時光征夷大
将軍宣旨也有御頂戴同廿二日御参内 中略
随劔之役渋川式部大輔直保随太刀之役
吉良右近将監満貞御沓佐々木新蔵人秀

注進之今川兵部大輔於近陣急たのさとす
也
松田貞秀記云應安元年、、、、御元服次進御劔（役右馬助此外御鎧弓征矢鞍馬内々被進之管領沙汰也）
又云永和元年三月廿七日石清水八幡宮御社参（中略）役人馬打次第如此御幣畠山兵部少輔御劔畠山左近大夫将監御調度佐佐木青地御沓千秋左近大夫近習（此内帯劔六人）

於社頭勤仕次第番之儀無之
又云永和元年四月廿五日御参内始御装束（衣冠）御雑色如御社参御劔細川右馬助頼基（今日被仰小侍所召具朝夕畢）云々
花営三代記云應安二年正月廿二日夜御社参（六条新八幡宮）役人御幣山名右馬助御劔同修理亮御沓千秋御調度佐々木佐渡四郎
又云永和元年三月廿七日石清水八幡宮

御参詣中略御剱畠山左近大夫将監左兵衛
督路次ノ行粧ヲ調ヘテ天龍寺ヘ被参詣
ケリ中略七番ニハ役人ニテ南部遠江守宗
継高ノ播磨守師冬ノ二人ハ御剱ノ役云
々

鹿苑院殿御元服記云永和九年三月廿七
日石清水八幡宮御社参中略御幣畠山兵部
少輔御剱畠山左近大夫将監

鶴岡事書案云應永七年三月御八幡宮
御社参御代始三月廿四日己丑陰時々雨
御幣役加子三郎 御剱役山名小三郎 御沓
役二階堂下野守

松田長秀記云正長二年三月九日御元服
中略於御鬢所御祝儀有之則献御剱六本次加
冠ノ尾州着坐被聞召三献大草調進之次被進
上御太刀白役左馬助 此外御鎧御弓征矢鞍馬

等被進上之仍註文掃部頭請取之置御前
云々不及讀申欲次被下御劔於加冠大館刑部
大輔持房勤其役
建内記云永享二年二月廿五日新中納言
送使鹿苑院殿義満初比八幡御社參供奉人等
可注進之由被仰下之旨示之註申了云々
状云明德二年三月廿八日乙卯今日室町
殿御參詣八幡宮中略御劔伊勢七郎左衛門
尉持之宗量朝臣傳給之於社頭彼朝臣可
持之也
康富記云宝德二年十月五日是日室町殿
著直衣御參内也中略還御東獨也自中御
門東洞院邊上下執松明者也御一献有之
云々殿上人頭右大辨日野勝光朝臣御簾役中四人略
之數國朝臣滋野井左少將○御沓役綱光衛府長取之御沓渡殿上々以上
奉行廣橋藏人權右中弁永継御劔役役冷泉左兵衛權佐以上

八人各束帯但雖衛府官皆不帯劔弁官三
人駕小八葉其外五人乗文車
宗五大双紙云諸役の事公家ニハ皆貴類
武家ニハ太刀持貴類申也
應仁別記云三月十四日金吾御成被申一
色兵部少輔御劔ノ役
了俊大草紙云御劔の役仕ときは遠所に
御出時ハ御劔を帯て御前に打あり昔

醍醐乃紅葉御覧ニ当御所御出乃長柄
御參をして時自ふもちて侍りしつはる
よりおく御劔をもつきて步きまして太刀
をつけまくも気かりしを感しおほしくは於
刀たまはりてありり
大内家壁書云御前陪膳并御劔役事任先
例可為遊習者役然甚仁者可有斟酌也但
至別依之仁而之儀者可為其儀之由依仰

辟書出件明應二年十二月日

二水記云永正十五年正月十日今日法参
内可有之由也未終剋有御参内細川右京
大夫被官人辻々令警固云々参會衆如例
年於置石立御劍御輿一色弥五郎役也云
云

室町殿醍醐登山日記云永正十五年七月一
十七日自早旦僧正房予両人出仕拝殿奉
待魁限辰半剋御成中略先釈迦院中門開之
門主遊上御蹲踞官門跡之外則御輿被寄
東様入御畢御劍役右馬頭如此也云々領家衆参向中門外蹲
踞令敬屈畢

小上記云御太刀と申ハよりて御劍と申
事あるまし候公家様のを御劍と申ハ一定
外にも殿人のをも御劍と申

大館常興記云天文九年三月八日御参内左

し
中略 御供衆御剱役細川三郎四郎云々
又云天文十一年卯月八日未刻還御也
云々御輿仍御供衆御剱役左衛門佐々木
外上野与三郎細川三郎四郎佐々木民部少
輔伊勢守同朋云春阿何茂如先々条翁不
ともう化よりて也
義輝将軍御元服云四月廿一日御元服之
次第今日午刻御出御所安艱書まり大学殿

下御公御肩衣小袴御板輿被召御小人四人
御走衆云人御供衆大館伊豫守御剱武田
中務大輔何も肩衣袴也〻衆も肩衣
小袴着
光源院殿御元服記云天文十五丙午歳十
二月廿八日一辛丑公方家御成也御供衆三
騎次第上野民部大輔信孝御剱役但帯右
方云々乗葦毛馬著足半御供也

御供故實云八幡なとへ御參詣并御朝ニ
御劔乃役人ハ弓うつかはたらきせはす
せきは御太刀を持てたのれせぬ事同断
とは雑色ともにても厩者ともにても付るなり　只
ちうたぬよくは御劔を右乃手にて持
又たゝれせるにもよろしし
供立日記云御供の時御劔并御役人は御
輿乃脇ニ役をするへし　御輿の後ニ御太刀持の馬
其間は半町程可行半町程乃中程ニ御太刀
持の小者をも先にして可行程ニ入候得は御
太刀持御輿のきはへ寄り役所ニ而可然左
右候とも常の御供乃節も同事也
諸大名亭御成記云或ニ亭上りく
亭屋中門の内ニ公卿其外殿上人御供進上
此御馬并御覧并御劔の役者御劔を持て
御殿の上ニ御座の座に伺候也左右の引手

其家者此釼を持て御劔役者此釼を持
上ル並ひに持て有る也
奉公覚悟記云 御劔くのする公家には当を
當職こそよし此武家には太刀とこそいふ實
職也 公方ニは御供衆馬上にしくもての述ハ
大名衆中間之者ともなる此く如きの時は侍
者ニも有る此也
持たる公方家にてる太刀を持たる

の役は勅勲つとむる者なり御劔役といふ
事此御文治の時より公役あるまじく重
役也 有書ニ大名家より記して中間も
てる事候ニ記もしは無之なり
家中竹馬記云 公方様の御劔を御供衆ニ
ても御家の持まる也 何事くも御感乃
時は馬上ニ而帯ひし（秘本ニ帯と云）御陣の太刀
之外無之なり

又云御太刀持衆とは御まへにめしつかはるゝしま
て御太刀をもちて畏事ノ後御中間に御
太刀を渡してさて御のさやをはつし刃を抜て
背代をも持事也御供衆の内弟一人覚悟に
太刀早参すへし遅参しく御しやうある間
猶なりはやくしと急事は失錯に可成也
又云大名衆は太刀を持役人を弟一人
仁祢也一ツとて御所の根に被下さき儀也文

家来子息にて御供衆をさせられ
若党ゟ一ツとも也常には御供衆をもたせら
るゝなり但太刀ハ此儀あるへし
松陰私語目録云國繁廣瀬御鋼役未編遣
馬具寸法記云御供の時下馬衆は
太刀の役人下馬衆は左我兄召ゆく也をも
出て右を持つて為勝手十勝は自身にかゝへわり
出あり出すことあふしよせては手に持さ

りありしさうめに従ふ動くきては方よりさつき速の
御手力の役人下馬いつる所とて首とおりて
せて取りいてあるよしい
嶋津家御成記云御進上し御馬數式正名
如舊記立候の節まて此の色正方様も書之
之内合此成御覧請供候も庭上にお掛候ら
其御数の役人計御報錦可有御供御式
正不及二其儀一方にも如紀同し式正し用意ハ

役者し出立らし打大臼以下並る用意之段
有し事也同名多し役ノつるようし嶋津
野州御手に被渡之中間ヲ人としく御手に白縄
さとさし置いし門前にて幸野州請とらせ
縄をとらし世御鷹匠の備の立候之照らし
上杉御手之者猶木村八ニ郎度へ被渡之事
又御進上之節御手〓〓〓霜臺被渡之
増補家忠日記云慶長十年八月廿六日台

德院殿将軍宣下ノ拜賀トシテ車ニ駕メ
朝ニ入給フ行列御剱役酒井宮内大輔家
次
東武實録云元和三年四月十七日本社ニ
於テ法會アリ公御登山御束帯奉幣大沢ーサ
将御簾藤右衛門佐御太刀吉良左兵衛督
御剱酒井下総守御裾永井信濃守是ヲ役
ス

寛永十一年御上洛記云七月十八日御参
内中略二條ノ御城中ニ而ハ御簾上野介御刀
於京御ニ所司代板倉[illegible]人[illegible]先日御自
防守下国発シ前介来朝ニ付[illegible]葉院随
先日来供奉ス

ノ役阿部豊後守御劔御沓等ハ御近習ノ面々役之

様御劔役を常此方とはあまり御太刀役ともいふ

御笏役

吾妻鏡云正嘉二年六月四日壬午今日勝長寿院供養也云々巳剋将軍家之渡御（御束）帯紫袍御帯劔供奉人行列（中略）於勝長寿院大将（門）税

御車下御云々御堂上之門相州武州下ニ居御前階下給又黄門参進御劔御笏其後供狠云々

調度懸

御禊行幸服飾部類云（康治元十廿六宇槐記）滝口調度懸十人調度懸不扱尻剥礼胡簶如常云

吾妻鏡云養和二年正月三日甲戌武衛御行始ニ渡御于藤九郎盛長甘縄之家佐々木

四郎高綱懸御調度在御駕之傍足利扈若
北條殿畠山次郎重忠三浦介義澄和田小
太郎義盛以下列御後
又云文治五年七月一日己未鶴岡放生會
也已剋二品御出供奉輩被用去月九日人
數但勅使河原三郎懸御調度云々
又云建久元年十一月九日己未二品令参
院内給云々御調度懸中村右馬允時經青紺

丹州上御入洛日
所著給之水干也
又云建暦二年正月十九戊辰将軍家御
参鶴岳八幡宮先召大須賀四郎胤信被
仰可懸御調度由之処固辞之仰云於當役
者右大将家御時以二十之箭可射取廿人
敵之者可候之由被仰定畢然者奉之勇士
者可備面目之処稱下劣之職遁避條甚自
由也早可止出仕之旨蒙御氣色云々

「又云安貞二年七月廿三日将軍家渡〻
帯金刀金太刀握重藤弓負大中黒箭甲〻
木半ヲハ僕持之馬前ニ行歩馬毛黒随兵
皆着」糸毛鎧甲敷皮半ヲハ各僕持」之皆〻
ヲカク僕ハ絆ノ直垂ニ銀薄ニテ文ヲ押
ス皆調度懸手蓋ツラスキ任ニ先規」カ騎馬
ハ常ノ篭手欤、、、中略執権僮僕次第
童一人刀持調度懸一人号胡簶負云々」

義久軍物語云天保六正月廿七日はつうまを
うの八まんくうよくたいつりれこうたうはま我く
れきやうれ川のきうし挹先あらい四人二行
次とすり四人二行一負ノ三人中略次御てうし
どのげはうれ未れあうけよしきよ、あらためはあせしうく
く
尊卑分脉顕信男貞信左兵衛尉康永天龍寺
供養日御調度役

芋粥物語云　うちくらはしりて地よりちち　さんきいの条
うきんさうしきつふいらうまてきしきあい
ろをはくすこちん乗りて此姉しかちうを
ようひ推くやをたいすりをはいみやうはた
やうけふつのひさうり此ゐもたきつ二きう風う
みあしいをんでうどかけの人推んくらめて
にあひありふはもろひ乃まいしんりきう打
くいそとの人雅きうもうとしとひらとの人

今昔物語云利仁従ㇾ京敦賀将ニ行五位條五位ヲ前ニ立
テ共ニ馬ニ乗テ川原様ニ打出テ行五位
ノ共ニハ賎ノ小童ダニ无シ利仁カ共ニモ調度。
一。人。舎人男一人ゾ有ケル然テ川原打過テ
粟田口ニ懸ルニ五位何コソト問ヘハ利仁只此
也トテ山科モ過ヌ関山モ過テ三井寺ニ知
タリケル僧ノ許ニ行着ヌ然トモ湯有リ気モ无

シ五位何ゾ湯ト云ハ利仁實ニハ敦賀ヘ将
奉ル也ト云ヘハ五位糸物狂ハシカリケル人哉
京ニテ此ク宣ハマシカハ下人ナトモ具スヘカリケル者
ヲ无下ニ人モ无テ然ル遠道ヲハ何カテ行ント
為ツ怖シ氣ニ云ヘハ利仁咲テ己レ一人
カ侍ルハ千人ト思セト云ツ理ナルヤ此テ物ナト
食ハツレ急キ出ヌ利仁其ニテ胡簶取テ負
ケル

桜井ことに又宇治拾遺物語に見申候
利仁の供にはてうどからげひしと記されり
しきて到とりありろうと有り

罕、四才
太平記云天龍寺供奉条御幸可有トテ同八月二
十日将軍并ニ左兵衛督路次ノ行粧ヲ調
テ天龍寺ヘ御参詣アリ中略七番ニ八佐々
木吉田源左衛門尉秀長同加地筑前三郎
左衛門貞信ハ御調ノ役ニ供ス

又云（中殿御會條）此次ニ征夷大将軍正二位大
納言源朝臣義詮卿薄色ノ立紋ノ織物ノ
指貫ニ紅ノ打衣ヲ出シ常ノ直垂也（中略）佐
々木備前五郎左衛門尉高久二重狩衣ニ
テ御調度ノ役ニ候ス
鎌倉年中行事云公方様御発向事（中略）大御
門ヨリマカリ出馬ニ乗其間ハ御旗ヲハ
被官人ニモタセ馬ニ乗テ後御ハタヲサ
シ其後御先手十騎其次ニ御甲之役人梶
原名字被勤之其次ニ御調度之役上古ヨ
リ海老名勤之
又云公方様御発向事（中略）馳河ニテ御昼休
アリ御酒三献御湯漬参依御吉例本江土
佐守調進セラルヽイタチ河ニテ具足
ニナル御甲之役御鎧ヲモ被着御弓征矢
ヲハ御調度役帯之武蔵之府中高安寺ニ

御著陣之時又御具足ヲメス凶徒等悉有之
御退治還御之御様躰御発向之時御同前
也
鹿苑院殿御元服記云永和元年三月廿七
日石清水八幡宮御社参（中略）御幣畠山兵部
少輔御劔畠山左近大夫将監御調度佐々
木青地六郎左衛門尉
松田貞秀記云永和元年三月廿七日右清
水八幡宮御社参（中略）役人馬打次第如此御
幣、山兵部少輔御劔畠山左近大夫将監
御調度佐々木青地御沓千秋左近大夫近
習（此内帯劔六人）於社頭勤仕次第沓之儀無之
又云同年四月廿五日御参内始御装束（衣冠）（廿八ウ）
御雑色如御社参（中略）御調度佐々木越中四
郎左衛門尉今度供奉一頭打
松田長秀記云永享十二年七月廿五日大

将御拝賀供奉行列次第(中略)執権僮僕次第

童一人(折カサ)調度懸一人(号胡簶負)云々

花営代記云應永十年正月廿二日夜御社

参(六條新八幡宮)役人御幣山名右馬助御劔同修

理亮御沓千秋御調度佐々木佐渡四郎

又云同卅一年二月十日(丙辰)御的始、御

的アリ三ケ度一色阿波太郎持兼三、後

弓被参十也御調度役二郎(下総守)左衛尉貞房

建内記云永享二年七月廿五日御拝賀也

大将御拝賀次第(普光院左大臣義教于時大納言右大将)行列

次衛府侍十人相具調度懸

武藤系図云頼平男資頼号筑後守法名覚

佛窮弓箭之奥儀間依仰下建久年中鎌倉

右大将家源頼朝々臣将軍内裏御参之時

懸御調度

(十六)助無智秘抄云賀茂祭装束ツ子ノコトシ

六位垣下藏人二人〈中略〉藏人裝束位袍黒半
臂蘓芳下重浮文袴〈但白色〉尻鞘平緒浅沓相
具ヘキモノ御藏小舎人府随身二人ケヒ
井シハカ〈看〉トノオサ〈長〉二人随身二人テウト〈調度〉
カ〈拭〉ケ一人フヘリスヘシ
了俵大嘗紙云件社氣の時御幣の役事〈中略〉
御調度掛ヽ仕ろ木の盤の人くの役なりし
布衣紀云主人矢を持ハ弓持事あり調度
懸持く随身調度懸懸ハ紫裏衛府時ハ桿折
時可着也衛府時ハ立烏帽子走水干也色
ハ萠木上下同色桿折時ハ折烏帽子赤皮
の烏帽子懸紙纐ハ小結装束ハかちいろの
よろひ直垂な理
又云調度懸の事ハ烏帽子紙よりハ小結
ハ赤皮の烏帽子懸福布也盤ハ赤革の
紐ある時もくゝりを入てすくく上矢を

ゆんでを持ちて衛府の時は不可然但し
このほかのたちをさしはさむ事その外は同
じの也

鎧著

兜持 又兜役

吾妻鏡云文治元年十月廿四日癸酉今日
南御堂勝長寿院被遂供養 略 御堂上胤頼参進
取御沓高綱著御甲候前庭観者難之以脇
立著甲上為先云々爰高綱小舍人童聞此
事告高綱々々嗔曰著主君御鎧之日若有
事之時先取脇立進之者也加巨難之者未
辨勇士之故實云々
又云文治二年二月廿六日壬午中將家御
參鶴岡八幡宮云々御出供奉人先陣、、
、、次御劒役後藤兵衛尉基綱次御調度
懸糟屋藤太兵衛尉有季次御甲著大井次

郎実久次御冑持中野五郎能成

又云兼久元年正月廿七日戊子八テ日将軍家右大臣為拝賀御参鶴岡八幡宮云々随兵小笠原次郎長清甲小櫻威武田五郎信光黒甲糸威。下八人略之各冑持一人張替持一人傍路前行云々

又云安貞二年七月廿三日将軍家渡御駿河前司義村田村山荘是為遊覧田家秋興也辰尅出御御出行列先随兵十二騎相分左右。姓名略之次御引馬三疋次御弓袋差一人次御鎧着一人次御乗替二人次御駕下略

相國寺供粮記云路次行、先陣随兵一番武田伊豆守源信在撥副略之張替中間男小笠原兵庫助源長秀撥副略之張替甲役皆中間男

鎌倉年中行事云公方様御發向之事中略御甲之役御鎧ヲモ被着御弓征矢ヲハ御調

皮役帯之
又云公方様御発向事中略大御門ヨリマカ
リ出馬ニ乗其間ハ御旗ヲハ被官人ニモ
タセ馬ニ乗テ後御ハタヲサヽ其後御先
手十騎其次ニ御甲之役人梶原名字被勤
之
随兵日記云甲ハ役人ニ持せ我家のヽ
ほしこゆひあし乃をきつへし

らのてう緒のけをすへき也
又云甲持役人次ニ弓箭持役人同徒歩の
弓持役人次ニ太刀持役人いつれもまはりつき
勤うしれに是も但の白くらきを入へし次
に胴丸をきつせ刀はこしまきのつくくゑゑ
うらをさすへし是も家此村の太刀し
こんひあし同志同しうけをさ蔵ちつきのを
用へし是なりとたたすへし

随兵次第云総甲持は中間成へし。但かぶと
持も中間也さりて此ひとり持はまつのうしろ
方をとらへなし右手の方を打かけてかなし
右のひの緒を取てそれうすつし
武具雑記云甲の緒の保し事

大将軍出陣之時甲持弓手に立旗持り
唐差わり出る時は御甲をもし弓手にかなし

膝をつきてぬきさるへしよろしき様のことハ
乃緒ハ右の手に総懸て鞢の内へ左の手にて
つゝみかけて取はなしてとくへし扨後の弓を
取て弓に添へし拝る事ハ右の膝を付て
如此なしてから馬の右の方へまはす様にて
ゝとまはすへうしハ胄ハ太刀に添へし
手馬にて馬をよせ甲并鞍をとりて左の
手に鞭を持て右の手にてきせ候ひハ鞍を

一 馬上にて弓持事ハ太刀弓を腰にさしはさみ
右乃手にては弦の関を向へつかへて弓を
了 左甲の役人弓の前を帯しなからハ弓を
右へ取直してこぬき入て甲を前に懸へし但
取付よろしく弓手馬手何れも用事有ら
そもそもハ馬鎧前を一手はつすへし其を沾
前にて取て此恐事を比矢にしてくへし
まへの如事あるへし

小具足持

（四九・三三ウ）吾妻鏡云暦仁元年二月十七日癸巳子刻御入洛着于六波羅御所給行列先駿河前司随兵（三騎相並以家子三十六人為随兵）御所随兵百九十二騎（三騎相並各弓袋差一人歩走三人在前）次御甲着一人次御冑持一人次御小具足持一人次御引馬一足文應元年十一月廿七日庚寅卯剋将軍家御参鶴岡八幡宮辰剋二所御進発供奉人（行列）不被立先陣随兵十騎次御引馬次御弓袋差次御甲着次御冑持次御小具足持次御調度懸

具足役

弓征矢役

行縢役

（十三・一）吾妻鏡云建久四年正月一日己巳将軍家御参鶴岡八幡宮還御之後有垸飯（中略）梶原

左衛門尉景季持参御行縢云々

六十七 又云元久二年正月一日己未遠州被献垸飯并御馬御剱以下其役人御弓征箭三浦兵衛尉御行縢皆足立左衛門尉

廿六ノ二 又云貞應元年正月一日庚戌奥州任例被献垸飯若君出御南面妻戸間讃岐中将（右京）（兆賀）参進被巻上御簾人々奉謁之先被進御剱（八ニ）錦袋足利武蔵前司義氏持参之次御弓箭駿河前司義村次御行縢（左 皆）小山左衛門尉朝長次御馬五匹

卅五ノ二 又云寛元元年正月一日戊寅垸飯足利左馬入道沙汰御剱前右馬権頭政村御調度若狭前司泰村御行縢佐々木壹岐前司泰綱持参之

鎌倉年中行事云御元服ノ時管領出仕アリ御装束調テヨモテノ御妻戸之間ヘ有

御出御酒式三献御劔御鎧弓征矢皆行騰
参其以後御馬御鞍置テ一疋牽添一疋八
夕セ也御厩別當被請取之此御祝共皆自
管領参御劔役御一家弓征矢海老名行騰
本間名字度々勤之衆中之記録可有之御
具足役者名字不定役人御荷用ノ人皆直
垂也

又云公方様御発向事（中略）大御門ヨリマカ
リ出馬ニ乗其間ハ御旗ヲハ被官人ニモ
タセ馬ニ乗テ後御ハタヲサシ其後御先
手十騎其次ニ御甲之役人梶原名字被勤
之其次ニ御調度之役上古ヨリ海老名勤
之其次ニ弓征矢御劔役御一家之人被勤
之

又云正月五日ノ夜御行始管領ヘ御出恒
例也（中略）其後御鎧白糸是モ被官中之宿老

両人メ持テ出ル時役人出向テ上手勤ス
ル人御具足ノ右ノカタヲ受取下手ノ人
ハ左ノ方請取テ上手ノ人マツ跡ニ立テ
下手ノ人ハ御妻戸ノ内ヘ入テ廰テ立廻
上手ノ人上ヘ成テ是モ御劔ヨリ六七寸
ノキテ鍬形ヲ御坐アル方ヘ向テ進上イ
タシテ下手之人ハヤカテ出ラレ上手ノ
人ハ居留テ御具足ヲ御坐アル様ニサヲ

ニマワシテ其後可罷出

武家名目抄稿第廿四冊上

明治十六年三月　日旧稿校正　小野由久

同年同月十日再校并書　青山景通

同月十三日以旧稿遂一校了　源[illegible]

同　十八年四月廿三日校　勝田知足

圖書局文庫

同十八年四月廿二日校　勝田味足

同年十二月十三日以福邊一校了記之

同年同月十日　再校了書　青山景通

明治十六年十二月　日田編校了　小野由久

国立公文書館
National Archives of Japan